

夢の手

高田敏子詩集

花神社

* 詩集 夢の手

発行 一九八五年十一月二十四日

二刷 一九八七年九月二十五日

著者 高田敏子

装画 横田 稔

発行者 大久保憲一

発行所 株式会社花神社

東京都千代田区猿樂町二一五

興新ビル六〇五 電話二九一・六五六九

印刷所 工友会印刷所

製本所 松栄堂

用紙 文化エージェント

一九八五年 © Printed in Japan

0092-850132-1092

詩集
夢の手
*
目次

白い花	6
夕陽	12
貝の名	16
橋	20
寒夜	22
夢の手	26
閉ざされる窓	30
秋の海辺	34
下弦の月	36
夏実子	40
耳朶	44
薔薇	48
おばあさん	52

雪の下	56
道	60
叔母	62
まるみ	66
空を見上げて	68
時	70
鳥	72
夕焼け	74
リスの目	76
声	80
手の記憶	84
あとがき	88

夢
の
手

白い花

灯を消して

床に体を横たえたと

ノートに書き写したことがある

詩の一節が思われて来る

眠っているものからは降るのだ

棚引いている雲からのように

重力の豊かな雨が

リルケの「重力」と題された詩の終連なのだが

私　このとき　微笑を浮かばせている

わが身を横たえて識る

わが身から降るゆたかな雨に

私は微笑をむけている

その微笑は　私が始めて生んだ子に

乳房をふくませていたときの微笑に結ばれているように思う

私が看護した兵士の

高熱の中で呼びつづけていた　かすかな声の女名前に

私が答えていたときの

兵士の微笑 私の微笑 にも似ているように思う

遠い過去の年月から 立ちもどって来た私の微笑よ

闇に白い花が開いてゆく

白いむくげの花のような

私が私自身にむける微笑の花を闇に咲かせて

私は眠りに入ってゆく

私はもういまは 悲しみに眠れない夜を持ちたいとは思わない

闇に目を見開いたまま悲しみを見つめつづける力も消え去っている
私の心はもうどこへ行くこともなく私の中であって
私を眠りに引き入れてゆく

毎夜 私はそうして眠る

私一人を包む闇の 眠りの 平和を思つて――

窓の外の軒下には 白猫が眠っている

昼間何度かこの家の庭に来て 縁の敷居に前脚をかけ

家の中をのぞき見している猫

宿のない猫が この家の軒下に来て眠っている

猫もいまは雀を追うこともなく

庭の柿の木の幹で爪を研ぐこともなくなっていた

猫も白い花になっている

夕陽

この辺り静かなのですね

帰りがけの門灯の淡い明りの下でその人は言った

ええ とても静かです 物音一つしませんわ

私 門口の萩の傍に立って 萩の花の紅色を摘みながら答えている
一人ではさびしくありませんか？

え？ その声を聞いたような 聞かなかったような

顔を上げたとき

人は門灯の下を離れ 後姿のまま暗い小道の角を曲って行った

萩の花は散りつくし

葉も黄ばみ 散りはじめて

枝の乱れをあらわに見せはじめている

家の出入りに そんな萩の枝に触れ

行きずりの人がふと笑みかける そうしたほんのわずかな間の笑みに

その時の間だけをあたためられ 日が過ぎてゆく

人の心は いつもわからない 私の心でさえ

人を恋うる思いと 拒絶の思いが入り混り

「二人ではさびしくありませんか」

あるとき その言葉がたしかに言われたとしても

「はい」と言うか 「いいえ」と言うか

昨日私は 午後の便で福岡に飛び 玄海灘を見下ろす宿に眠り

今日の午前中 “講演” と言うには面映ゆい話をして来た

「生きるよろこびをつくる心」

（自分を支えてゆくための言葉を作り出してゆかなければ……）

これは私自身への語りかけでしかないのだ

帰途の機上で私は眠りつづけた

この日 昭和59年11月1日 帰宅して手にした新聞には

インディラ・ガンジー女史の死が報じられている